

かにも吉田さんに教えられた歌が数曲あったと思うが全然覚えていない。

楽器などハーモニカさえない軍隊で、どうしてああいうメロディが出来上がるのか全く不思議でならなかった。シベリア抑留から帰り、「異国の丘」の歌が流行し、その作曲者が初年兵時代五カ月余り起居を共にした吉田正上等兵であることを知り、全く感無量であった。

今テレビに出て来る吉田正氏は、若いころの小柄で丸顔は昔のままながら、やっぱり年取ったなあと、自分のことを棚に上げて懐かしく見ている次第である。

### 【執筆者の紹介】

学歴 岩手県立花巻農学校卒業

満鉄農業技術者養成富拉基農業修練所修練

入隊 満州琿春一三一二五部隊甲斐隊

昭和十九年十月入隊後幹部候補生となり  
石頭予備士官学校に転属

武装解除 横道河子

抑留地 ライチハ十九收容所

復員 昭和二十二年四月二十四日

復員後職業 農業

(岩手県 田辺 壮久)

### シベリア抑留記

岩手県 菅原 登喜雄

終戦なのか敗戦なのか

時は昭和二十年八月十四日の昼頃である。「召集令状だ、とうとうきたぞ」、第四部落の千栄郷の川村昭一君が馬を走らせながら叫んで行った。(その後本人はこの地で死亡したと聞かされた)

この地は満州国北安省綏稜県昭北開拓団本部部落名豊秋郷として第一第二部落に分割されていた。本部より二キロ手前に大和郷の第三部落、本部の奥に千栄郷の第四部落があった。戦争は激しく一人一人に召集令

状が手渡されず、文書により一度に四十人余り召集された。翌日集合地に着いたとき、八月十五日、予期しない悲しい敗戦の知らせであった。

#### 初めて見るロシア人 ソビエト兵

歴史的八月十五日から二カ月にわたる逃避行、生活の場所を何度も変え荒野を彷徨、不安と恐怖の日々、このような思いは二度とあってはならない。十月十三日に綏化という町の部隊に入隊することになっていたが、敗戦の知らせで団の指導者が海倫の守備隊長に連絡に行った。

団に帰って次の命令を待つよう報告した。ゲリラ戦の用意をせよという海倫の日本軍守備隊長の命令であった。隊員は三〇人ほどと聞いた。次の命令が報告された。おとなしく団にある粗末な兵器を国民政府軍警察隊に渡し武装解除を受けるべし。私達は命令に従い武器を返納した。団を追われ、彷徨の逃避が何日も続いた。やがて流浪の旅も終わりを告げた。

綏化の町に到着。町のあちこちで中国人の略奪と破壊。建物の窓のない空き家に住んだ。初めて見るソビ

エト兵、背が高く鼻が高い。見るからに大男である。時折、中国人とソ連兵が物色しようとしてきて、「ダワイ・チャツスイ（時計を出せ）」と要求した。度重なるにつれ、強行に装具検査をし、万年筆、時計など没収された。取られる方も考え、帽子のうらに時計を縫い付ける、またはセツケンの中に埋めこんで難を逃れた人もいた。

ソ連兵の自動小銃、日本の小銃から見ると進歩的な物であったが、兵士はアメリカより購入したと伝えた。すべての物資はUSAのマークが付いていた。アメリカの物資の援助がうかがわれた。

時は流れ、十月の中頃、朝夕めっきり寒く、先行きが思いやられた。ソビエト兵、中国人の略奪、強姦、連日続いた。

#### シベリア行きだ

収容された建物、ガラスのない窓から、毎日シベリアに強制抑留で送られる関東軍北支派遣軍の兵士、下士官、将校等満載の列車が通るのが見えた。誰かが兵隊さんと一緒に行きたいと言った。馬鹿だなあお前

は、捕虜として連れていかれるんだぞ。でも食うのは心配ないだろうと誰かが言った。

この収容所に来てから朝と夕に粟のにぎり飯一個だけで、昼飯はなしであった。翌日、国民政府の警察がきて、働きに出ろという。飯を食わせてやると三十人ほど駆りだされた。引率され、綏化の駅の製材所のような所で製材した製品の荷役であった。食料事情の悪いのに体力などあるわけがない。肩にくいこむ角材は重く、杖をたよりにどうにか仕事が終わった。あまりに見苦しく哀れであった。このとき菊地時雄君がよろめきころんだ。幸い体にはがはなかつたが、ソ連軍将校が彼を収容所に帰した。この人は現在も健在である。

収容所に帰宅寸前、ソ連兵が貨車の扉を開け、全員この中に入れとロシア語で怒鳴り、銃剣をつきつけている。全員貨車に入るとガチャと扉が閉まった。列車はシベリアに向かって発車した。

ああシベリアだ　バイカル湖だ

シベリアに送られた日本兵は、ハイラルから満洲里

を通過して乗り換えなしの部隊もあったという。私の乗った列車は黒竜江近くの黒河の駅に止まった。駅構内にはソ軍の戦利品が山積みされていた。私の部隊は元四人の入った建物に収容された。毎日のように凍り付いた黒竜江の大河を渡り対岸のソ連領ブラゴエシチェンスクの駅までソ連戦利物資をそりで運搬した。一台のそりに三人ないし五人の編成、飢えと酷寒は私達を容赦なく襲い、力尽き耐えかね逝く多くの尊い命が、無残にも凍土の中に眠った。

大隊の半分はすでにシベリアに出発した。私の中隊は奉天北稜で編制された五四大隊第三中隊、隊長名矢沢少尉殿であった。いま一つの合流した大隊は北支六三師団第九大隊望月中尉殿であった。

やっと荷役の労働が終わわり、ブラゴエシチェンスク駅から貨物列車に乗った。列車はシベリアの奥へとひた走る。誰かが、日本海のウラジオストックだ、帰れるぞ、フショー・ダモイだと言ったが、それとはうらはらにガタンゴトンと走り奥地へと進んだ。バイカル湖と勘違いしたようだ。ある人は日本海だと叫んだ。

「ばかたれが、バイカルは九州より大きいぞ」と誰かが怒鳴った。列車は吹雪を突いてシベリアの奥地へと走る。列車に乗って何日になるだろう。無性にのどが渇く。貨車のすき間は人の吐く息で白く凍っている。ナイフで水を取って水がわり、のどを潤した。

スターリンスク地区第七収容所に着いた。時は昭和二十年十二月十四日であった。所長はイエリング中尉である。収容所には先客がいた。ポーランド人、ドイツ人の捕虜が少数である。所長のイエリング中尉は帝政ロシア時代の貴族の孫の子で、父か祖父かが革命に協力したので優遇されたという。誰が聞いたか、中尉は三十六歳で妻は十八歳とか。この収容所に着いてから北支六十三師団の九大隊は一大隊と呼び約千人、四つの中隊で大隊長望月中尉殿、半分の五十四大隊は約五百人で、どの大隊もこれまでの死亡者が含まれていた。二大隊と呼び、私の中隊は五中隊矢沢少尉殿で、六中隊は橋本中尉殿であった。七中隊は少数七十人で編制、警察官と満軍の将校の人達、中隊長は長谷川中尉殿であった。私の小隊長は山口見習士官。

この地で三年、長い歲月であった。来る年も来る年もダモイの日は長かった。労役作業は、除雪、ストロイチカ建設作業、キンザボート煉瓦の製造と製品の窯出し作業、シャフト石炭の採掘と搬出作業と色々な労役に課せられた。食料不足、飢えと酷寒そして苛酷な労役は、抑留者を死の世界にと追いやった。まさに生き地獄そのものであった。二度と悲惨な戦争を起こしてはならない。この体験は我々で終わりにしたい、後世の人々のために。

当時私は若かった。昭和二十年八月二十五日、弱冠満十八歳と四カ月、氣力と若さで耐え抜いた。

ダモイの日が来た。二十三年七月七日、夜まで労役が続いた。すぐさまダモイの支度をし、キシロフの駅まで夜通し歩いた。私たちは皆、小躍りして喜び、男泣きした。シベリアの奥地からダモイの列車は今我らに乗せて一路ナホトカへ発車した。十日ほどして終着ナホトカに着いた。車中の夜は種々瞑想の境地にひたり眠れなかった。

八月十六日、日本から迎えの船がきた。いよいよ乗

船だ。元気な声が爆破した。思えば長い長い抑留に終  
止符をうった。舞鶴に上陸して八月二十六日家路につ  
いた。

いまだ凍土に眠る抑留犠牲者の遺骨収集もはかどら  
ず、その数万とも六万とも聞いているが、早急に遺  
骨収集の処置が要求されると思う。

### 【執筆者の紹介】

生年月日 昭和二年八月二十五日

学歴 昭和十七年国民学校卒業

満州開拓義勇軍内原訓練所修練

入隊前の職業 満州開拓義勇隊として満州開拓

入隊 昭和二十年八月十四日

抑留地 スターリンスク第七收容所

復員 昭和二十三年八月十六日

復員後の職業 農業

(岩手県 田辺 壮久)

## シベリア強制抑留記 歳月の残像

福島県 太田 俊一

ソ連(ロシア)領に入る

昭和二十年十月下旬、北満の孫呉から瑗瑗、黒河、  
さらにその北を流れる黒龍江を船で渡り(この直後、  
結氷)上陸、そこはブラゴエシチェンスク(旧ソ連  
領)であった。町の様子が今までいた満州とは一変し  
て、建物をはじめ往き交う人々の顔形からすべてが異  
国情緒にあふれ、しばしの間見とれていた。

と、急に周囲が騒がしくなった。どこからともなく  
ソ連兵が数人、いや、その何倍か知らぬ大勢のソ連兵  
が自動小銃を構え、たちまちのうちに我々を囲んで何  
やら叫んでいる。「ダワイ」「ダワイ」「チャースイ・  
ナーダ・エース」、左手を前に出し右指でその手首を  
指しながら、何と腕時計をよこせと言っている。また  
「カレンダース・エース・ダワイ」と。これは、万年